

# 青春の掟

諸星澄子

COBALT BOOKS



もろほし・すみこ

一九三二年六月神奈川県川崎市に生まれる。都立南多摩高校から慶応義塾大学経済学部に進学。卒業後しばらく会社勤めした後、作家生活に入る。「電機計算機のセイルスマン達」は直木賞候補になった。現在、同人雑誌「小説と詩と評論」に所属し、文壇、ジュニア小説界で活躍中。コバルト・ブックスには「幸福に散った人」「砂と海の合唱」「光と影の花園」「素足の天使」「今はむなし、彩子に花束を」「心ざわぐ青春のとき」などがある。趣味は旅行と植物研究。



青春の掟

0393-661096-3041

昭和47年 3月10日 初版印刷

\* 定価はカバーに表示してあります

昭和47年 4月10日 初版発行

著 者 諸 星 澄 子

編 集 株式会社 サン・パブリシテイ

東京都千代田区神田神保町1-29  
電話 (294) 2781

発 行 者 陶 山 巖

印 刷 所 中央精版印刷株式会社 錦印刷株式会社

発行所 東京都千代田区  
一ツ橋2-5-10 郵便番号 101 株式会社 集英社 電話 東京(265)代表6111  
振替 東京 15653番

# 青春の掬

諸星澄子



集英社

\* 目 次 \*

青春の掟

|        |     |
|--------|-----|
| 昔の恋人   | 11  |
| 敗北感    | 20  |
| 寛容な愛   | 28  |
| 不思議な兄妹 | 37  |
| マンションで | 49  |
| 疑惑     | 62  |
| こたつの中  | 71  |
| 好きな人   | 81  |
| おれの倫理  | 89  |
| 悲しい誓い  | 97  |
| 短剣の刃先  | 107 |

飛躍のとき

因果応報

愛より愛をたどり

異端者

誘い

おふくろの歌

母の面影

密告者

モデル

千波の素顔

恋の奴隷

雨の中で

126 120

242 235 222 207 193 179 164 149 135

日本財団支援

財団法人日本科学協会

カ  
ツ  
ト  
・  
安  
田  
三  
恵

# 青春の掟



原书缺页

原书缺页

# 原书缺页

原书缺页

## 昔の恋人



きよう、意外な人物に会った。

石本浩介だ。校門を出たところで、すぐ前を歩いているのが浩介だと気づいたのと、その浩介が振りむいたのが同時だった。

浩介が振りむいた、というその動作自体が、なぜかわたしをおどろかせた。わたしの知っている浩介は、道を歩きながら決して振りむいたりしない男だったからだ。

なぜそんなふうに思いこんでいたのか、よくはわからない。たぶん、浩介がひどく横着おうろくでなぜやりな性格であることを、わたしはいつのまにか信じて疑わないようになっていたからであらう。

浩介はわたしを見て、なんだ、というような顔をしたが、それでも足だけは止めて待っていてくれた。わたしがかつて見なれた、面白くなさそうな面おもてがまえたかった。

この男はあいかわらずぶらぶら顔をしている、とわたしは思った。

「帰るのかい？」

浩介はぶっきらぼうにいい、すぐに愚問を發したのに気づいたらしくにが笑いた。無感動なかわいた笑いだった。

「しばらくね」

わたしはいい、通学カバンを右手に持ちかえて浩介と並んだ。わたしは、ふしぎななつかしさにそそられている自分を意識し、なぜともなくうろたえた。

一度は、この浩介をばげしく誘<sup>さそ</sup>いかけてもみたわたしだった。それらの苦しかった日々を、わたしはたちまち思い出した。

それが恋であつたかどうか、いまとなつてはわたし自身にも不明だった。浩介のつかみどころのない態度に、強いいらだちを感じたことは事実だった。

恋というものが、男女にかかわるある緊迫した精神状態をさすのなら、あれはまさしく恋であつた。あれほどまでに、わたしの精神を緊めつけた感情を、わたしはその前にも、そしてその後にも知らなかったのだから。

浩介は、わたしの精神を緊迫させるだけさせておいて、そのくせわたしに安息というものを与えてくれなかった。

彼はついにひとことも、〈愛〉ということばを口にしなかった。たえがたくなって、先にそのことばを口にしたのはわたしのほうだった。

「愛しているわ。どう考えても、やっぱり愛しているの」

浩介はしばし、いやな顔をした。

「よせよ、そんなことをいわれると、居心地<sup>いこち</sup>がわるくてしょうがない」といった。

「だってほんとうですもの」

「それなら、いまのうちにやめたほうがいいぜ。おれみたいな男にかかわりあっても、ろくなことはない」

そんなことを、平然といつてのける男でもあつた。

「おれには、女は愛せん」

そんなこともいった。

わたしは、なんの希望もない片恋のために、浩介を深追<sup>ふみお</sup>いしたのだろうか。

わたしにはわからない。

なぜなら、一方においてわたしたちのしていることは、他の恋人たちのしていることとそう違わなかったからだ。

わたしたちはデートもしたし、それがふつうの恋人たちといっふう変わったやり方であったにしても、とにかくふたりだけのたぐさんの時間を持った。

会うたびにくちづけがあり、抱擁<sup>ほうよう</sup>があった。わたしは最後のぎりぎりのものだけは許さずにいたけれど、それに類する行為なら、何度も経験した。たいてい、わたしの家の、わたしのへやのベッドの上だった。

わたしは勘ちがいしていたのだ。そのような行為の前提にあるものは、たとえそれとはっきり表明されないにしろ、〈愛〉であるとはかり思っていたのだ。

そしてわたしは、少しずつ、自分の誤解に気づくようになった。

といって、浩介は決してプレイボーイではなかった。だから最初のうち、わたしはそれが、わたしへの愛を認めたくない、浩介一流のポーズだとばかり思いこんでいたのだ。

が、やがてそうでないことがわかった。

相手が自分をほんとうに愛しているかいなか、そんなことはどんな鈍感<sup>どんかん</sup>な女の子にもしぜんとわかるものなのだ。ましてやわたしは人より敏感な体質であるつもりだったにもかかわらず、わたしが浩介に愛の片鱗<sup>へんりん</sup>を求めて深追<sup>ふみお</sup>いしたのは、状況があまりに不可解<sup>いかかい</sup>だったからだ。

わたしはあるとききわめて客観<sup>かくかん</sup>的になり、その状況分析<sup>ぶんせき</sup>をしたりした。

わたしはかなりうぬぼれの強い女の子だったのだ。

そのわたしのうぬぼれが、的確な判断をにぶらせたのかもしれない。どんなにそう思おうとしても、なお浩介にわたしへの一片の愛もないことを信じることができなかったのだから。

そのくせ、わたしが呼べば、浩介はいつもきた。くればかならず、接吻があり、抱擁があるのだ。浩介の抱擁ははげしくて、いつもわたしのうちに嵐をまきおこした。

このひとは、やっぱりわたしを愛しているのだ——わたしがほとんどそう信じかけたころ、いつも彼はいうのだった。

「さあ、こんなことは、もういいかげんにやめよう。いつまでこんなことをしていても、きみは幸福になれやしないんだからな」

わたしは、そのたびに、どんなにおどろいてそのことを聞いたことか。

このような日々のくり返しのなかで、そしてわたしはしだいに疲れていった。

結局、わたしは自分から浩介をはなれた。

石本浩介という男は、わたしにとって、永遠に不可解な存在として残った。

わたしが傷を負わなかったといえ、うそになるだろう。

だが、わたしには、浩介によって受けた傷をいやしてくれる相手があった。わたしは浮気女のように、胸から胸へと移ることに、さしたる罪悪感もおぼえなかった。

そして、いまわたしには信彦のふりこがいる。

「どうだい、太田おおたは元気かい？」

浩介はわたしと並んで歩きながら、その信彦の名を口にした。

「学校で、会っているでしょう？」

「いや」

そういうえば、三年生になってから、ふたりがべつべつのクラスになったことをわたしは思い出した。理科系の秀才を集めた最強のクラスに、なぜか浩介ははいっていなかったのだ。そのことを信彦から聞かされたときにおぼえた疑問を、いまわたしは口にだしていた。

「じょうだんいっちゃいけない。おれはそんな秀才じゃないからな」

浩介はにやりと笑いながらいった。

いつもの皮肉だ、とわたしは思った。浩介が秀才でないはずはなかった。信彦も学年で十四、五番といい線をいってたが、浩介のほうが、さらに好成績をマークしているはずだった。

「あいかわらず、皮肉やさんなのね」

わたしはいつてやった。

「なんのことだ」

「あんたは昔から、皮肉ばかりいつている人だったわ」

「昔とは大げさだな」

「昔よ。まだ一年もたっていないけど、でも、わたしには、ひどく昔のことだわ」

わたしはいった。

「それにあなたは、昔からちつともほんとうのことをいわない人だった。わたしにはあなたという人が、とうとうわからなかったわ」

「そんなことはないだろう」

浩介はいった。どうでもいいようないい方だった。

そんな浩介に、もうわたしはいらだちをおぼえなかった。淡々とした彼の語り口に、わたしはむしろ妙ななつかしさのようなものをそそられていた。わたしはいった。

「でも、ふしぎね。あたし、あなたを少しも憎んでいないみたい。こうやってお話ししていても、